

寺田寅彦

糸車



糸

車

祖母は文化十二年（一八一五）生れで明治二十二年（一八八九）自分が十二歳の歳末に病没した。この祖母の「想出の画像」の数々のうちで、一番自分に親しみとなつたかしみを感じさせるのは、昔の我家の煤すすけた茶の間で、糸車を廻している袖無羽織を着た老媪の姿である。紋付を着て撮った写真や、それをモデルにして描いた油絵などを見て、なんだか本当の祖母らしく思われないが、ただ記憶の印象だけに残っているこの「糸車の祖母像」は没後四十六年の今日でも実に驚くべき鮮明さをもって随

時に眼前に呼出される。

この糸車というものが今では全く歴史的のものになってしまったようである。自分の子供などでも誰れも実物を見たことはないらしい。産業博物館とでもいうものがあるれば、そういう処に参考品として陳列されるべきものかも知れない。

祖母の使っていた糸車はその当時でもすっかり深く煤色に染まっていたいかにも古めかしいものであった。恐らく祖母の嫁入道具の一つであったかも知れない。或は又曾祖母の使い慣れたのを大切に持ち伝えたものであったか

も知れないのである。兎に角、祖母は自分の家に嫁いでからの何十年の間はこの糸車の把手とつてを恐らく何千万回或は恐らくは何億回か廻したことであろう。

自分も子供固有の好奇心から何度か祖母に教わったこの糸車で糸を紡つむぐ真似をした記憶がある。綿を「打った」のを直径約一糎長さ約二十糎の円筒形に丸めたものを左の手の指先で撮つまんで持っている。その先端の綿の繊維を少しばかり引出してそれを糸車の紡錘の針の先端に巻付けておいて、右手で車の把手を適当な速度で廻すと、つむの針が急速度で廻転して綿の繊維の束に撚よりをかけ

る。撚りをかけながら左の手を引き退^のけて行くと、見る見る指頭に撮んだ綿の棒の先から細い糸が発生し延びて行く、左の手を伸ばされるだけ伸ばした処でその手を挙げて今出来上っただけの糸を紡錘に通した竹管に巻取る、そうしておいて再び左手を下げて糸を紡錘の針の先端にからませて撚りをかけながら新たな糸を引き出すのである。大概車の把手を三回廻す間に左の手が延び切つて数十糎の糸が紡がれ、それを巻取ってから、また同じ事を繰り返す。そういう操作の為に糸車の音に特有なリズムが生ずる。それを昔の人は「ビーン、ビーン、ビーン、ビー

ン、ヤ」という言葉で形容した。把手の一廻転が「ビーン」で、それが三回繰返された後に「ヤ」のところで糸が巻取られるのである。「ビーン」の部で鉄針とそれにつながり糸とが急速な振動をしている為一種の楽音が発生するが、巻取るときはそうした振動が中止するので音のポーズが来るわけである。要するにこの四拍子の、凡そ考え得らるべき最も簡単なメロディーがこの糸車と云う「楽器」によって奏せられるのである。そのメロディーは実に昔の日本の婦人の理想とされた限りなき忍従の徳を讃美する歌を歌っていたようなものかも知れない。

右手と左手との運動を巧みに対応させコーオルディネートさせる呼吸が中々六かしいもので、それが出来ない
と紡がれた糸は太さが揃わなくて、不規則に節くれ立つ
た妙な滑稽なものに出来損そこねてしまうのである。自分な
ど一二度試みてあきれてしまつてそれ切り断念したこと
であつた。

一と年とせか二た年ぐらい裏の畑に棉を作つたことがあつ
た。当時子供の自分の眼に映じた棉の花は実に美しいも
のであつた。花冠の美しさだけでなくて花萼かがくから葉から
茎までが言葉では云えないような美しい色彩の配合を見

せていたように思う。観賞植物として現代の都人にでも愛玩されてよさそうな気のするものであるが、子供のと
き宅の畑で見た切りでその後何処でもこの花にめぐり合
ったという記憶がない。考えて見ると今時棉いまじぎを植えて見
たところで到底商売にも何にもならないせいかも知れな
い。尤も、統計で見ると内国産棉実千噸トン弱とあるから、
未だ何処かで作っているところもあると見えるが、輸入
数十万噸に対すればまず無いも同様であろう。

花時が終つて「もも」が実つてやがてその蒴さくが開裂し
た純白な綿の団塊かたまりを吐く、うすら寒い秋の暮れに祖母や

母と一緒に手々てんでに味噌漉しみそこを提げて棉畑へ行つて、その収穫の楽しさを楽しんだ。少しもう薄暗くなつた夕方でも、この真白な綿の団塊だけがくつきり畑の上に浮き上がつて見えていたように思う。そういうとき、郷里で「あお北きた」と呼ぶ秋風がすぐ傍の竹藪を戦おのかせて棉畑に吹き下ろしていたような気がする。

採集した綿の中に包まれている種子を取除く時に、「みくり」と称する器械にかける。これは云わば簡単なローラーであつて、二つの反対に廻る櫛材の円筒の間隙に棉実を喰い込ませると、綿の繊維の部分が喰い込まれ喰い

取られて向う側へ落ち、堅くてローラーの空隙を通過し得ない種子だけが裸にされて手前に落ちるのである。面白いのは、このローラーが全部木製で、その要部となる二つの円筒が直径一糎半位であつたかと思うが、それが片方の端で互いに噛み合つて反対に廻るようにそこに螺旋溝が深く掘り込まれていた。昔の木工がよくもこうした螺旋を切つたものだとい寸不思議なようにも思われる。尤もこの噛み合わせがかなりぎしぎしと軋きしるので、その減摩油としては行燈あんどんのともし油を綿切れに浸ませて時々急所急所に塗りつけていた。それで把手を廻すと同

じリズムでキュルキュルと一種特別な轢音を立てるのであった。「みくり」を通過して平たくひしやげた綿の断片には種子の皮の色素が薄紫の線条となつてほのかに附着していたと思う。

こうして種子を除いた綿を集めて綿打ちを業とするものの家に送り、そこで糸車にかけるように仕上げして貰う。この綿打ち作業は一度も見たことはないが、話に聞いたところでは、鯨の筋を張った弓の弦で綿の小団塊を根気よく叩いて叩きほごしてその繊維を一度空中に飛散させ、それを沈積させて薄膜状としたのを、巻紙を巻く

ように巻いて円筒状とするのだそうである。そうして出来た綿の円筒が糸車にかけて紡がれるわけである。

田舎道を歩いていると道脇の農家の納屋なやの二階のような処から、この綿弓の弦の音が聞こえてくることがあった。それが矢張四拍子の節奏で「パンパンパンヤ」という風に響くのであった。恐らく今ではもう何処へ行ってもめつたに聞かれない田園の音楽の一つであろうと思われる。

明治二十七八年日清戦争の最中に、予備役で召集されて名古屋の留守師団に勤めていた父を訪ねて遊びに行つ

たとき、始めて紡績会社の工場というものの見学をして非常に驚いたものである。祖母が糸車で一生涯かかって紡ぎ得たであろうと思う糸の量が数え切れない機械の紡錘から短時間に一度に流れ出していた。そこにはあのゆるやかな抑揚ある四拍子の「子守歌」の代りに、機械的に調律された恒同な雑音と唸音の交響樂が奏せられていた。

祖母の紡いだ糸を紡錘竹つむだけからもう一遍四角な糸繰棒こに巻取って「かせ」に作り、それを紺屋こうやに渡して染めさせたのを手機てばたに移して織るのであった。裏の炊事場かまやの土間

の片隅にこしらえた板間に手機が一台置いてあった。母がそれに腰をかけて「ちゃんちゃんちやきちゃん」というこれもまた四拍子の拍音を立てながら織っている姿がぼんやりした夢のような記憶に残ってはいるが、自分が少し大きくなってからは、もうこの機は余り使われなかったらしい。併し自分の姉の家ではその老母がずっと後まで、自分等の中学時代までも、この機織りを唯一の樂しみのようにして続いていた。木の皮を煮てかせ糸を染めることまで自分でやるのを道楽にしていたようである。純粹な昔風の所謂草木染で、化学染料などの存在は

この老人の夢にも知らぬ存在であった。この老人の織った蒲団地が今でも未だ姉の家に残っているが、その色がちつとも褪せていないと云って甥の乙が感嘆して話していた。

いつであったか、銀座資生堂楼上ではじめて山崎^{たけし}氏の草木染の織物を見たときに何故か涙の出そうなほどなつかしい気がした。そのなつかしさの中には恐らく自分の子供の時分のこうした体験の追憶が無意識に活動していたものと思われる。又今年の初夏には松坂屋の展覧会で昔の手織縞のコレクションを見て同じようななつか

しさを感じた。もし出来れば次に出版するはずの随筆集の表紙にこの木綿を使い度いと思つて店員に相談して見たが、古い物をありだけ諸方から拾い集めたのだから、同じ品を何反も揃える事は到底不可能だといふので遺憾ながら断念した、新たに織らせるとなると大分高価になるそうである。こんなに美しいと思われるものが現代の一般の人の目には美しいと思われなくなつてしまつたという事実が今更のように不思議に感ぜられた。話は脱線するが、最近に見た新発明の方法によると称する有色発声映画「クカラツチャ」のあの「叫ぶが如き色彩」など

と比べると、昔の手織縞の色彩は正しく「唄う色彩」であり「思考する色彩」であるかと思われるのである。

化学的薬品より外に薬はないように思われた時代の次には、昔の草根木皮が再びその新しい科学的の意義と価値とを認められる時代がそろそろめぐって来そうな傾向が見える。いよいよその時代が来る頃には、或は草木染の手織木綿が最もスマートな都人士の新しい流行趣味の対象となるという奇現象が起こらないとも限らない。銀座で草木染が展観されデパートで手織木綿が陳列されるという現象がその前兆であるかも知らないのである。そ

うして、鋼鉄製或はジュラルミン製の糸車や手機が家庭婦人の少くも一つの手慰みとして使用されるようなことが将来絶対にあり得ないということを証明することも六かしそうに思われる。現に高官や富豪の誰れ彼れが日曜日にわざわざ田舎へ百姓の真似をしに行くことのはやり始めた昨今では猶更そんな空想も起し得られるのである。

昔の下級士族の家庭婦人は糸車を廻し手機を織ることを少しも恥かしい賤業とは思わないで、つつましい誇りとし或は寧ろ最大の楽しみとしていたものらしい。ピク

ニツクよりもダンスよりも、婦人何々会で駆け廻るよりもこのほうが遙に身に沁みて本当に面白いであろうということは、「物を作り出すことの喜び」を解する人には現代でもいくらか想像が出来そうである。

序ながら西洋の糸車は「飛び行くオランダ人」のオペラの一と幕で実演されるのを見たことがある。やっぱり西洋の踊りのように軽快で陽気で、日本の糸車のような俳諧はどこにもない。又、シューベルトの歌曲「糸車のグレーチヘン」は六拍子であって、その伴奏のあの特徴ある六連音の波のうねりが糸車の回転を象徴しているよ

うである。これだけから見ても西洋の糸車と日本の糸車とが全くちがった詩の世界に属するものだということがわかると思う。

この糸車の追憶につながっている子供の頃の田園生活の思出は本当に糸車の紡ぎ出す糸の如く尽くる処を知らない。そうして、こんなことを考えていると、自分がたまたま貧乏士族の子と生まれて田園の自然の間に育ったという何の誇りにもならないことが世にも仕合せな運命であったかのような気もしてくるのである。

(昭和十年八月)

日本文学電子図書館

糸 車

著 者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系 29

筑摩書房

昭和46年6月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館